

成果報告書

記入日 2017 年 4 月 日

氏名	水上 遼	渡航先国名	イラン	所属機関	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
研究テーマ： イルハン朝下のイスラーム社会の変容：スンナ派・シーア派関係を中心に					
研究期間： 2014 年 7 月 ～ 2017 年 3 月（松下国際スカラシップ受給期間は 2016 年 3 月まで）					
研究成果（概要）					
<p>ペルシャ語の総合的な運用能力を向上させ、さらにその過程で、これまでの研究成果をペルシャ語で論文にまとめてイランで出版した。また、12～14 世紀に書かれた十ニイマームに関するファダーイル（美德文学）作品を網羅的に分析し、その分野でのシーア派の戦略的著述活動を明らかにできた。</p>					
研究成果（詳細）					
<p>報告者は本スカラシップの支援のもと 2014 年 7 月から 2016 年 3 月末までイランのテヘラン大学人文科学部歴史学科に留学し、その後別の研究助成を得て 2016 年 4 月から 2017 年 3 月初旬までイラン滞在を延長した。本報告ではこれらを一つの留学期間とみなし、その成果を記す。</p> <p>留学期間はおおまかに最初の 1 年間の①ペルシャ語能力の研鑽とペルシャ語論文執筆の期間、2016 年 4 月までの②研究活動の本格化の期間、2016 年 5 月から帰国までの③ゴム市滞在与留学最終段階の期間の 3 つに分けることができる。以下ではそれぞれについて詳述する。</p>					
<p><u>①ペルシャ語能力の研鑽とペルシャ語論文執筆（2014 年 7 月～2015 年 5 月）</u></p> <p>イラン滞在を始め、指導教官であるテヘラン大学人文科学部歴史学科のラスール・ジャアファリヤーン教授に最初の挨拶を済ませたのち、報告者はテヘラン大学に付属するペルシャ語学校であるデフホダーに通学を始めた。デフホダーでは 6 段階あるクラスの内、最初のターム（週 5 日、40 日間）では Intermediate2（上から 3 番目）、次のタームでは Advanced1（上から 2 番目）に通い、それぞれ 20 点満点中 19、18 の成績で修了した。最上位クラスである Advanced2 に進む選択肢もあったが、テヘラン大学での学期が始まったこともあり、2014 年 10 月まででデフホダーへの通学を切り上げた。</p> <p>大学の講義は語学学校で学ぶペルシャ語と異なり、アラビア語由来の単語を多く取り入れた学術的な語彙が多く、慣れるまで聞き取るのに苦心した。また、イスラーム史の授業などで教員がアラビア語テキストを読み、即座にペルシャ語に翻訳する、といったことが行われる際には、頭がついていかず非常に苦しんだ。最初の学期は授業の内容を大雑把に把握するだけで手一杯といった状況のまま過ぎてしまった。</p> <p>大学の学期が始まるのと同時に、貴重な写本を数多く所蔵する図書館での写本・マイクロフィルム</p>					

のデジタルコピーの収集も開始した。この時期はゴム市のマルアシー図書館、テヘランのテヘラン大学中央図書館、マレク図書館での収集を始めるために準備を進めた。その際に調べた図書館の概要や外国人研究者の利用手続きの方法について、東京大学アジア研究図書館がウェブサイト上でやっているコラム『世界の図書館から』で記事を執筆し、日本の研究者向けに発信した（マルアシー図書館は同コラム第4回、テヘラン大学中央図書館は第10回、マレク図書館は第24回にそれぞれ記事を掲載）。

研究活動と並行し、全イラン書道家組合が開いているペルシャ書道教室にも通い始めた。書道は中東各地で古くから発達してきたもので、今日も人々に美術・素養として好まれている。日本と同様、自分の子供に習い事として学ばせることも多い。書道を学ぶことは、そうした現在のイランの文化を知ることだけでなく、自分の研究にとっても大変有用である。様々な手書きの写本を読む際に、手書き独特の書体を知ることが、写本読解にとって大きな助けとなりうる。ペルシャ書道には様々な書体が存在するが、報告者はイランで広く使われているナスタアリーク体という書体を、2014年秋から2年間学んだ。その結果、書くスキルを上達させ、かつ書体の特徴に精通することができた。

留学最初の一年間にもう一つ力を注いだことはペルシャ語による論文執筆であった。執筆の目的はそれまでの研究成果を整理するというだけでなく、自身のこれまでの研究を現地の研究者たちに名刺代わりに示すことが有益であると思われたからである。日本にイラン留学経験者や中東研究者が多いとはいえ、イランでは日本人研究者はまだとても珍しい存在であり、遠方の人間たちにイスラーム史がどれ程理解できるものかと疑われることもあった。そのため、それまでの自身の研究を現地語でまとめ、出版したいと考えようになった。指導教官であったジャアファリヤーン教授にアドバイスをいただきつつ、イルハン朝期にイラクやイラン北西部で活躍し、シーア派ともかかわりの深かったスンナ派の歴史家イブン・フワティー（1244-1322）の学術活動の特徴をまとめ、“Negāhī be zendegī va fa‘āliyathā-ye ‘elmī-ye Ibn Fovāṭī: Ta’līf-e *Majma‘ al-Ādāb* va ertebāt bā jāme‘-e rowshanfekrān（イブン・フワティーの生涯と知的活動についての一考察：『アダブ集成』の編纂と知識人社会との関係）”というタイトルで2015年春に学術雑誌『研究の鏡 *Āyene-ye Pazhūhesh*』に投稿した。この論文は2016年5月に出版された同雑誌157号に掲載された。

②研究活動の本格化の期間（2015年6月～2016年3月）

留学最初の一年が過ぎ、アカデミックなペルシャ語の運用能力が向上してきたところで、いくつかの新しい活動を開始した。まず、上述の写本を数多く所蔵する図書館でのデジタルコピーの収集活動を本格化させ、さらにイラン国立図書館、ゴムのイスラーム遺産復興センターでも収集を開始した。この2図書館についても上述のコラム『世界の図書館から』で記事を執筆した（イラン国立図書館は第27回、イスラーム遺産復興センターは第29回に掲載）。

また、イランの最新の学術状況を伝えるため、東京大学の『UTCMES ニュースレター』（vol. 8, 2016）に研究案内として「ラスール・ジャアファリヤーンと新出史料『タタル・モンゴルの王たちの諸事績』」という記事を寄稿した。この記事では、イランでの報告者の指導教官であり、シーア派史研究の世界的研究者であるラスール・ジャアファリヤーン教授の活動・業績の紹介と、教授による最新の新出史料の校訂の概要を示した。

2015年の半ばからは、収集した写本のコピーの読解を本格的に開始した。しかし、手書きである写本の読解には訓練が必要であると感じ、テヘラン大学でアラビア語文学を学んだ研究者に協力を依頼し、写本読解のための家庭教師となってもらった。テキストは14世紀の神学書の写本を用いた。文意の把握や、様々な専門用語の理解、写本作成者自身の誤字・脱字の可能性の考慮などの練習は非常に良い経験となった。この家庭教師による読解は2016年3月まで続け、後述のゴム市滞在を終えた後に再開し、帰国直前まで続けた。

③ゴム市滞在と留学最終段階

報告者は留学開始直後より、月に2回ほどのペースで、テヘランの南方にある都市であるゴムを訪れていた。ゴムには指導教官であるジャアファリヤーン教授が運営するイラン・イスラーム歴史専門図書館があり、非常に豊富な蔵書を持つほか、マルアシー図書館やイスラーム遺産復興センターなど写本・マイクロフィルムを多く所蔵する図書館が存在する。これらの文献を網羅的に閲覧するには、テヘランから稀に訪れるのでは時間的に不十分だったので、2016年4月から9月までの6か月間、ゴムに滞在してこれらの施設を集中的に利用した。

ゴムでは、12世紀末から14世紀前半までにペルシャ語やアラビア語で書かれた十二イマーム・シーア派で崇敬される十二人のイマームについての作品、中でもハディースから成る「ファダーイル *faḍā'il* (美德文学)」作品を中心に読解を進めた。この十二イマームは現在ではシーア派信徒の崇敬の対象として知られるが、中世においてはスンナ派信徒にとっても崇敬すべき対象と見なされることが多く、スンナ派側からもファダーイル作品が多数著された。12世紀にスンナ派側で特にその傾向が顕著になったのにあわせて一方のシーア派側が新しい著作のスタイルを確立していくことを、報告者はゴムでの滞在期間中に発見した。ヒッラを中心とするイラクのシーア派学者たちは、12世紀末からスンナ派文献を大部分ないし過半数用いて、かつそれらに表向き賛同する形で十二イマームのファダーイル作品を著していった。こうしたイラクのシーア派による十二イマームのファダーイルについての伝承・執筆活動は同地域のスンナ派にも影響を与え、スンナ派の著作の中にスンナ派学者たちが伝えるものと同等に信頼できる情報として引用されていった。こうしたファダーイル作品における両派の交流はイルハン朝期を中心とするこの時代の特徴的な現象であり、こうした現象の発見はイラン留学中の最大の成果と呼べるものであった。今後さらに分析を加えた上で、論文として発表したいと考えている。

さらに、ゴム滞在中には同市にあるファダーイル作品の蔵書が豊富なアッラーマ・マジュレスィー図書館にも頻繁に訪れ、資料を閲覧するとともにそこを運営する研究者たちとも交流した。

ゴムでの滞在を終えた後は、テヘランに戻り、収集した文献の読解に注力した。2016年11月にはマシュハド市を訪れ、同市にあるレザー廟図書館、フェルドゥースィー大学神学部図書館での写本のデジタルコピー収集を行った。その際には、同神学部の教員たちの歓迎を受けるとともに、日本のイスラーム史研究について講演を依頼された。そこで、11月9日に“*Motāle‘āt-e Tārikh-e Eslām dar Zhāpon* (日本におけるイスラーム史研究)”という題目で講演を行った。

報告者は2017年3月3日に留学を終えてイランを離れ、翌4日に帰朝した。

留学中の生活・研究でのトピックス

報告者は2016年4月から9月までの約6か月間、ゴム市に拠点を置いて研究活動を行った。テヘランとゴムの間は130キロほどしか離れておらず、地理的には「隣の州」だが、都市のもつ性格は大きくことなつた。テヘランは革命以前の世俗的な雰囲気強く残す町であり、女性たちは服装に関する様々な規定がありながらも派手な格好を好む人が多い。また、人々の口からは政府への批判が多く語られ、それが政府の権威の根本となっているイスラームへの批判に結び付くことも少なくなかつた。

一方のゴムは、イランのイスラーム体制の根幹ともいえる、イスラーム法学校 (Howz-ye 'Elmiye) の中心が置かれている都市であり、第7代イマーム・カーゼムの娘であるファーテメの墓廟がある参詣の都市でもある。故に非常に宗教色の濃い町であり、鮮やかで巨大なモスクが立ち並ぶ。女性たちはチャードルを着用していることが多く、男性たちも黒い服装をすることが多い。ここに暮らす人々は様々な宗教行事を熱心にこなし、少なくとも表向きにはイスラームを批判する者は少ない。また、上述の法学校や墓廟に来ようと世界中からムスリムが集まってくるため、ゴムはテヘランに勝るとも劣らない国際都市となっている。テヘランでは外国人である故に町行く人にしばしば奇異の目で見られたが、ゴムではむしろそうした目線を感じる頻度は減つたように思われた。

テヘランの世俗的な人々、インテリたちにとって、ゴムは非常にネガティブなイメージを持った都市であるようだった。私が資料収集や研究のために足しげくゴムに通うことを批判したり、心配したりする人も多かつた。それは、ゴムがテヘランの人々が嫌うイスラーム体制と密接な関係がある都市だからであることは明白だった。

このように、テヘランとゴムの二つの都市は、そのままイランの二つの顔をあらわしている。そのどちらかが紛れもなくイランの現実であり、イランの社会的、政治的多様性を如実に示している。この二都市の双方に腰を据えて滞在できたことは、留学先であるイランをより多角的に理解する非常に良い機会となつた。

今後の社会貢献

この度の留学経験を社会に還元するためには、まず何よりイランで収集した文献や学んだことを整理し、それを論文として世の中に発信する必要がある。モンゴル侵入前後のイラクにおいてシーア派学者集団が勃興し、それが当時の西アジアの政治や社会、宗派関係に大きな影響を与えたことは、研究者たちの間で知られてきた。それにも関わらず、彼らが具体的にどのような活動を通じて自身の影響力を拡大したのかに関してはほとんど研究の対象となつてこなかつた。今後はファダーイル作品における彼らの戦略的な執筆活動を手掛かりに、12世紀から14世紀のシーア派勃興の背景を明らかにしていきたい。

前近代の西アジアの宗教社会の在り方を明らかにすることは、現在へと至る同地域およびイスラームの発展の連綿とした繋がりを明らかにすることと表裏一体である。今日、西アジア、イラン、イスラームはメディア等によってネガティブな局面ばかりが切り取られ、さらにそれらは本質主義的な議論によって理解されてしまいがちである。そして、地域の文化・社会全体や、その中での多様性の理解はおざなりにされつづけてしまっている。報告者は今後研究者として活動していく上で、この留学の経験を活かし、そうした問題の解消と、より正確な地域・歴史理解のために取り組んでいきたいと考えている。

留学先となったテヘラン大学人文科学部



受け入れ教官であるラスール・ジャアファリヤーン教授



書道教室での風景



イランにて執筆したペルシャ語の論文



ゴム市近郊のジャムキャラーンでのマフディー（第12代イマーム）生誕祭



フェルドゥースィー大学神学部で2016年11月9日行った講演の様子

